

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4075500415		
法人名	医療法人 安倍病院		
事業所名	グループホーム みどりの里		
所在地	福岡県宮若市長井鶴230番地		
自己評価作成日	令和3年7月7日	評価結果確定日	令和3年8月10日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートウリずん		
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号		
訪問調査日	令和3年7月29日		

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

医療法人が母体の為、常に病院と連携をとって、月曜～土曜まで毎朝主治医に入居者の状態を報告し、体調が悪かったり、急変時にはすぐに対応できる体制が整っているので、家族の方・入居者に安心して生活を送ることができます。午後よりレクリエーションをして入居者同士の交流の場を設けております。現在コロナウイルス感染症の影響で2か月に1度家族会・茶話会を行っていましたが、ここ1年面会なども出来ていないため、行うことができていません。その代わりに、室内での運動に力を入れ、ごぼう先生という軽い運動のDVDや下肢の運動ができる機械を導入している。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

令和2年に見直した理念を、毎朝リビングに居合わせた入居者とともに唱和し、気持ち良い朝を迎えている。「はじめて食べた」「はじめて〇〇した」等の認知症独自の表現、感性などを再認識しながら、個々の状況に沿った意向や思いの把握に努め、入居者の其々の言動をそのままを受け入れたケアが、日々展開している。研修に参加しやすい環境をと職員体制だけでなくオンライン研修受講を推奨し、緊急時には母体医療機関に職員派遣を依頼するなど、事業継続体制が構築され、ICT機器の導入で、地域から篤い信頼を得ている母体医療法人との連携促進が期待される。何より、DVDのごぼう先生のレクリエーションでは歓声が上がると等、理念の「本人の意思を尊重したその人らしい空間づくり」に邁進している。

#### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

### 自己評価および外部評価結果

ユニット／事業所名 **Aユニット／みどりの里**

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎日理念をスタッフと入居者の前で唱和し、共有している。家族の方にも分かるように掲示している。	令和2年に見直した理念を、毎朝リビングに居合わせた入居者とともに唱和している。入居者との理念の唱和は、雰囲気作りに功を奏し、気持ち良い朝を迎えている。職員は、声に出すことで、理念の理解が深まると話している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	現在コロナの影響でできていない。	母体医療法人は地域の信頼が厚く、全入居者が病院や系列のデイケア利用から入居に至っている。母体医療法人が自治会に加入し、コロナ収束後も以前同様の地域交流を予定している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	現在コロナの影響でできていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回運営推進会議を行っているが、現在コロナの影響で文書のみを手紙で配布している。	2か月毎に、メンバーに入居者や受診状況、ヒヤリハットや事故等を会議録として送付している。返信用のハガキを同封し意見をお願いしたが、職員への労いの言葉があった。会議録は各ユニットの掲示板で公表している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	月1回市役所から電話があり、入居状況の報告をしている。	担当者と居室状況などで連携に努めているが、常に満室である。地域同業者協議会GHみやわかの活動を通じた連携が多かったため、GHみやわかの活動再開を望んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の研修にスタッフが参加するようにしている。月1回のカンファ時にスタッフ間で身体拘束についての話し合いを行っている。	身体拘束に関する外部研修資料の回覧や、ミーティング時に事例を通じて、身体拘束の具体的な内容の周知や適正化に努めている。言葉による拘束についても理解し、「○○だから待って」との声かけを励行している。夕方になると荷物をまとめて玄関から出て行こうとする入居者には、話題や気分を変えて入居者に寄り添った支援をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	防止策として、ストレスが溜まらないように話し合いや勉強会を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在1名、成年後見制度を金銭面のみに利用されている方がいる。	日常生活自立支援事業や成年後見制度に関する資料を整備している。後見人は利用料の支払いのみで来所されているため、当該入居者の暮らしぶりなどは、家族に報告している。権利擁護に関するオンライン研修に職員1名が参加予定である。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時説明を行い、不安や疑問に思うことは十分に説明し、納得したうえで家族・入居者にサインを頂いている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	クレーム・苦情があった場合は、すぐにカンファレンスを開き職員間で話し合いの場を設けている。	遠方在住以外の家族は毎月支払いに来所されるため、その折に心身の状況などを報告し、意見の表出を促している。コロナ禍前は毎日来所されていた家族が、「夢の中でご飯を食べていなかった」と来所され、玄関ドア越しでの面会を支援している。	定期的な食事や入浴などの状況報告書と併せて、ユニット全体の暮らしぶりや個別写真などを掲載したホーム便りの送付で、家族のさらなる意見表出を期待します。
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1度カンファレンスを開き入居者の意見交換をしている。	日頃から、管理者に清掃の手順や業務の効率について提案しているが、月1回の時間外のミーティングに手当が支給される予定で、全職員の参加が見込まれる。コロナ禍の中、オンライン研修が受講できる機器が設置され、電子カルテやタブレットの導入で、母体医療機関との連携を促進する予定である。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与水準の見直し、労働時間・有給をとれる体制を心掛けている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	職員の採用時は、差別のないように十分に配慮し、高齢者も採用している。	入職紹介サイトで入職した職員もあり、常勤や非常勤を含む39歳～81歳の男女の職員が就労している。70歳過ぎから81歳の現在も厨房を担当する職員やホームの畑を丹精に管理する71歳の職員もある。近々4名が離職するが、研修に参加しやすい環境をと新規に5名が入職予定である。緊急時には母体医療機関に職員派遣を依頼するなど、事業継続体制を構築している。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	現在コロナの関係で、研修がないため、スタッフ同士で人権意識を高め、共有を図っている。外部の研修を行う予定。	身体拘束や高齢者虐待防止に関する対応を運営規程に明記し、パンフレットに母体医療法人の「倫理及び法令遵守規定」を綴じ込み、人権教育や啓発活動に取り組んでいる。権利擁護に関するオンライン研修会に1名が参加予定である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月病院で行われている感染症の研修に参加している。職員一人一人の目標を設定して研修予定を作成している。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	現在コロナで研修がほとんどできていない。		
<b>II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者がどんなことに困っているか、不安になっているか見極めてスタッフが話を傾聴し、安心して頂くように支援する。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が来られた際、入居者の状況を報告しコミュニケーションを図っている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居者の状況を知るため、ケアマネジャー・主治医から話を聞き本人・家族からの要望を聞いている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の生活歴を知り、家族から話を聞いたりして、信頼を築くようにしている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナの影響で情報交換の場がとれていない。家族とは、支払いに来られた際や、電話で状況報告をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナの影響でできていない。	母体医療法人で入居者や職員はワクチンを接種し、玄関ドアごしでの面会を支援している。ジュースや菓子などのおやつを持参する家族もあり、関係継続を支援しているが、家族の顔が認識できなくなった入居者もある。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	コミュニケーションがとれるように、スタッフが間に入り支援に努めている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	病院とのかかわりがあるので、いつでも要望など聞ける体制である。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の意向を把握し、スタッフ間で情報交換している。	「はじめて食べた」「はじめて〇〇した」等の認知症独自の表現、感性などを再認識している。男性同士の会話で信頼関係を築いたり、難聴の入居者には補聴器を使って孫との面会を支援するなど、個々の状況に沿った意向や思いの把握に努めている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居者らしい生活が送れるように支援している。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日申し送りし、記録を確認するようにしている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人と家族に要望を聞き、ケースカンファを開き、入居者のニーズを見つけ出すようにしている。	担当職員のモニタリング結果や家族の意向を話し合い、日々のケアに活かしている。頻回にトイレを訴える入居者や人形を愛でる入居者、夕方になると荷物をまとめ玄関から出て行こうとする入居者の其々の言動を、そのまま受け入れたケアが実践されている。	個々の言動に沿った課題の抽出で、個別性のある計画を作成し、さらなる本人の意思を尊重したその人らしい空間づくりを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者の情報は、共有できたり、記録を見たりして知ることができる。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の要望に応じて買い物に行ったり、電話をしたりしている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	年2回消防訓練を行っている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	日・祝日以外はドクターに毎朝入居者の状態を報告し、体調の変化時にすぐに対応できる。	母体医療機関からの入居者がほとんどで、医療連携体制に家族は安心している。専門医療機関受診には職員が家族と同行したり、受診先で家族と待ち合わせ、適切な受診を支援している。母体医療機関の看護師1名と、24時間オンコール体制をとっている。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	病院と連携しているので何かあればすぐにナースに連絡し、指示を仰げる体制が整っている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	何かあれば病院へ連絡できる体制が整っている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りは行っていないが、今後はできるだけ、GHで介護をしていく方針で、最終的には主治医と相談して生活の場を決めていきたい。	入居時、重度化や終末期の方針を説明している。入居時は看取りの希望が多いが、その場になるともっと長生きしてほしいと入院を選択する家族が多く、現在まで看取りはない。今後は看取り体制を整備予定で、職員の看取り研修が必要と、管理者は話している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故の時は病院へ連絡できる体制が整っている。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回訓練を行っている。非常食は3日分準備している。	年2回、夜間を想定した避難訓練を行っているが、今回は水害を想定し、隣接する医療法人3階のデイクアに、車イス入居者を含めた避難訓練を予定している。食料等の備蓄台帳を整備し、入居者の緊急連絡先などの持ち出し書面を準備している。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者に合わせてトイレ等周りに配慮して支援している。	○○さんと名字で呼称しているが、家族の了解を得て馴染みの○○ちゃんと呼称することもある。大声を出さず、耳の遠い入居者へは耳元でゆっくり話かけるなど、個々の入居者に合わせた対応に努めている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の意思を尊重し、入居者にあった支援に努めている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人に合わせた生活が送れるように支援している。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入居者それぞれに合った声掛けをし、整容している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	声掛けしながら手伝っていただけるところは一緒にするように心がけている。	業者から納入された食材で調理しているが、入居者が下ごしらえしたホーム畑の芋づるの1品が食卓に上がることもある。入居者の希望のメニューを業者に伝えたり、誕生会には職員手作りのケーキを楽しんでいる。「弁当を出して」との要望に、弁当箱の利用を検討している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分量や食事量の記録をしている。一人一人にあった食事を提供している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	朝・夕の食後に口腔ケアを行っている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	入居者に応じて、声掛けしたり、オムツチェックをしたりしている。	排泄が自立している入居者も多いが、職員が排泄状況を確認している。排泄後失神する入居者もあり、動向に留意している。日中はトイレに誘導しているが夜間のみおむつを使用している入居者もあり、なかにはおむつ外しなどの行為がある入居者もある。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分をこまめにとるように心がけている。医師の指示で下剤を服用したりしている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	週3回・週2回の入浴を決まった時間に行っている。	特殊浴槽や個浴槽が設置され、全入居者が全身浴を楽しんでいる。同性介助の希望はないが、1番風呂の希望には応えて、時には最後にゆっくりと入ってもらうこともある。入浴を億劫がる高齢(104歳)の入居者の体力に応じた入浴回数を検討している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間1時間おきに巡回を行っている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎食後、飲まれる方の名前をスタッフが確認し支援している。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物たたみ・テーブル拭きのお手伝いやレクリエーションに参加していただき、気分転換を図っている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナでできていない。	コロナ禍で、花見や初詣にも出かけられない現状のため、現状が収束した折には、彼岸花などの花見に出かけたいと管理者は話している。ホーム外周の散歩で、職員が端正して育てたサツマイモやかぼちゃ、ブドウの生育が眺められる日を待ちわびている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	認知症のため、お金の管理が難しく、ほとんどお金を持っている人はいない。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	連絡できる体制はあるが、電話したいという方は少なく、家族からは定期的な電話がある方もいる。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホームの外に木を植えプライバシーの保護と日よけになるように工夫している。	玄関の両側に各ユニットが開所し、玄関は中ドア越しで家族との面会の場となっている。各ユニットの中央に中庭やウッドデッキが設けられ、明るく解放感がある。中庭のプランターには季節の花が植えられ、回廊式廊下は広く、所々にソファが置かれている。居間のユニット間の仕切りは使用はないが、ユニット毎にまとまって食事をしたり、DVDのごぼう先生の体操などのレクリエーションで歓声上がる等、居心地良い場所となっている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者同士が廊下や日向ぼっこができるようにベンチを置いて雑談できるようにしている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族には使っていた家具など持ってきていただいていたと説明はしている。	全居室に洗面台が設置され、筆筒やハンガーラック、椅子等が持ち込まれている。主治医の指示で、転倒に配慮してベット傍にジョイントマットが敷かれた居室もあるが、色違いのマットを入居者が敷き直すなど、個別性のある居室となっている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	できることはなるべくしていただき、残存機能の活用して頂いている。		